

資料

集団会話の手話通訳における場の調整技術

中島亜紀子*・四日市 章**

手話通訳に関する研究の多くは、通訳の言語的側面、つまり日本語と手話の間の言語的変換作業や表現された手話の特徴や誤り、それに対する聴覚障害者の評価などを主な対象としてきた。本研究では、手話通訳者が会話場面の円滑な進行のために行う場の調整の役割に焦点を当て、実際の集団会話の通訳場面を対象に、通訳者の行った調整的機能を抽出分類した。その結果、手話通訳者は、もとの言語情報に加えて、「確認」や「発言者の明示」、「呼びかけ」、「付加」などの機能を果たす情報提供を行ったり、もとの言語情報の訳出を適宜省略したりしていることが明らかになった。これらは、通訳の時間的な遅れを解消し、手話と日本語の会話表現の差異に対応しながら、重複する音声情報の中からより重要なものを選択して確実に伝達し、更に、聴覚障害者が発言するタイミングを作り会話への参加を促進するなどの機能を果たしていることがわかった。

キー・ワード：手話通訳 集団会話 場面調整機能 手話通訳実践技術

I はじめに

聴覚障害者が社会的な活動において自らの力を最大限に発揮しうするには、彼らと健聴者との間の円滑で確実なコミュニケーションを確保していく必要がある。聴覚障害者のコミュニケーション手段としての手話の存在は、社会の中で広く認識されるようになったが、聴覚障害者と健聴者との間での敏速かつ確実な情報交換を保障する手話通訳については必ずしも十分な配置がなされていない。近年、手話通訳の有効性が認識され、そのニーズも高まっており、量的および質的な充実は、聴覚障害者の社会参加にとって緊急な課題となっている（上久保・比企・福田, 1997）。手話通訳の対象となる手話そのものに対しては、科学的、実践的な関心が高まってきており、手話の言語的特徴に関する知見の

蓄積や、辞書の作成等の進展をみせている（米川, 1984; 神田, 1994）。しかしながら、手話を交えたコミュニケーションの通訳については、一定以上の手話技術をもつごく一部の人々によって支えられているため、通訳に伴う様々な実践的な課題を問題意識をもって捉え、それらを客観的に分析しようとする試みは未だ少ないのが現状である。

手話通訳の研究は、手話通訳者養成プログラム作成の基礎として、手話通訳者の用いる手話の特徴などを主な対象として、これまで米国を中心に行われてきた。最近では、実際の手話通訳作業に焦点をあてたものが見られるようになり（Cokely, 1986; Siple, 1993）、我が国においても、若松（1991）や白澤（2000）が手話通訳者による日本語から手話への変換過程を分析している。

一方、これらの研究と視点を異にするものとして、Roy（1992）は参加者の相互作用が生じ

* 千葉県立八千代養護学校

** 筑波大学大学院人間総合科学研究科

るような通訳場面を分析し、手話通訳者が会話の進行を円滑にするために、発言が重なった場合の対応や、発言者相互の社会的地位の関係に対応して通訳方法を工夫するなど、手話の翻訳作業以外に、様々な調整を行っていることを示した。このことからRoyは手話通訳者の役割について、異種の言葉を単に翻訳する役割を担うだけでなく、会話場面での円滑な進行を促進するための役割を持った「参加者」であるという新たな捉え方を示した。またMetzger (1999)は、医療場面において、聴覚障害のある患者を健聴の医師が診察する場合の手話通訳について分析し、通訳者が、手話、音声、音声を伴う手話など、コミュニケーションの方法を使い分けながら、会話の諸調整を行っていることを明らかにし、Royと同様な主張を行った。さらに、Shaw and Jamieson (1997)は、教育実践の場で通訳者が聴覚障害児に与える影響を分析し、通訳者が自らの判断で単なる情報伝達以外の役割を担う事が多いことを示し、通訳業務において情報を扱う際の判断の基準を検討することが必要だとしている。

これらの会話調整技術については、我が国においても、全日本ろうあ連盟が、同時通訳中の「手話通訳実践技術」として示しているが(手話通訳士育成指導者養成委員会, 1998)、会話場面の調整技術についての具体的な分類・整理、また理論的な位置づけについては曖昧な状況であり、手話通訳者の効果的な養成の手立ては明らかとなっていない。また、外部からは見えにくい手話通訳者の調整作業を明らかにし、通訳を受ける健聴者がこれを理解し協力ができれば、参加者の協力によって、より通訳しやすい環境を作りだし、そこでのコミュニケーションをより円滑にすることが期待される。このような努力により、聴覚障害者が健聴者と対等な関係での社会参加が可能となろう。

ここでは手話通訳者が行う会話場面の調整技術とその役割を明らかにするための端緒として、手話^④を交えた1集団会話場面を事例的に捉え、手話通訳者が集団全体での会話の流れが

より円滑かつ正確に進むために行っている諸行為(場の調整技術)を抽出し、その特徴を分類・整理する。

II 方法

1. 対象者

手話通訳士の資格を有し、通訳経験が豊富で日常的に通訳活動をしている通訳者2名を対象とした。

2. 対象場面と参加者

成人の聴覚障害者3名と健聴者12名が参加する会議の通訳場面を対象とした。聴覚障害者のうち、2名は日常的に手話を使用しており、この会議の場では手話通訳を利用し、他の1名はパソコン要約筆記を利用した。通訳者等として、パソコン要約筆記者1名及び手話通訳者2名が参加し、参加者は全員で18名であった。会議は司会者を中心に特定の話題について情報や意見交換を行う趣旨のもので、所要時間は1時間36分であった。このうち、会議の趣旨や関連情報の説明のための部分を除外し、司会者が発言者を指名せずに自由に議論が行われた部分の中から、場の調整技術が比較的多く含まれていると思われる4場面(場面1～場面4, 計23分8秒)を抽出し分析対象とした。

3. 場面の収録

手話通訳者と聴覚障害者の様子を、2台のビデオカメラで収録した。ビデオカメラは、手話通訳者と聴覚障害者の手話が明瞭に見える位置に固定し、通訳者と会議に参加している健聴者の音声も録音した。手話通訳者は、通常手話通訳を行う場合と同様に、事前に会議資料を読み、聴覚障害者との打ち合わせを約20分間行った。手話が使用できる参加者に対しては、発言の際の手話使用は本人の判断に任せる旨を説明した。更に、対象とした手話通訳者2名とこれを利用した聴覚障害者2名には、後日収録したビデオを見てもらい、状況の説明と意見収集を行った。

4. 分析方法

(1) トランスクリプトの作成：会話場面での通訳者は、聞き取り通訳と読み取り通訳を行

っている。聞き取り通訳は、健聴者の音声発言を通訳者が聞き取って聴覚障害者に手話で表現する過程であり、読み取り通訳は、聴覚障害者の手話による発言を手話通訳者が読み取り、健聴者に音声で表現する過程である。これらの通訳は、健聴者、聴覚障害者の発言に対応してそれぞれ行われる。

ビデオ録画をもとに、参加者の発言、通訳者の手話及び音声を時間経過に沿って記述し、トランスクリプトを作成した。手話表現については、日本語ラベルを用いた単語レベルでの記述と、手話単語以外の表情など非手指動作為補助記号を用いて記述し、併せて手話原文とした。

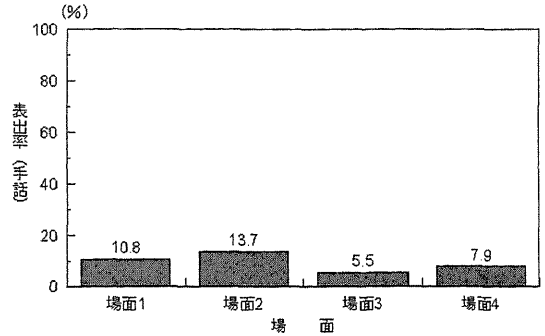
(2) 調整技術の抽出と分類：通訳中の会話の調整に関わる要因を抽出するため、通訳者の表出する手話および音声について、手話通訳者の、①非訳出表現と②訳出の省略という観点から分析を行った。①の非訳出表現とは、原文の訳出以外の、通訳者の意思による表出であり、聞き取り通訳におけるものと読み取り通訳におけるものが含まれている。②の訳出の省略は、原文に含まれるにもかかわらず訳出されていない内容であり、聴覚障害者の発言の省略と健聴者の発言の省略に分け、それぞれ出現する場面の特性を分析した。

(3) 非訳出表現の分類：非訳出表現の分類は、先行研究等 (Metzger, 1999) に基いて、「発言者の明示」、「繰り返し」、「聞き返し」という3項目を基本として行うこととした。

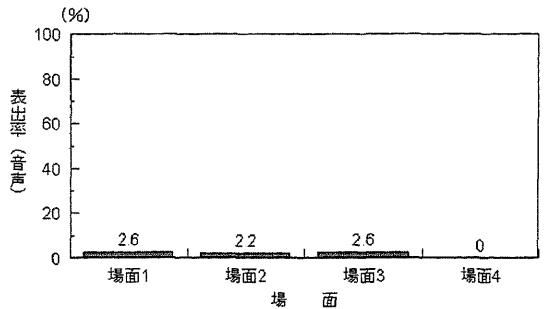
Ⅲ 結果と考察

1. 非訳出表現の抽出

分析対象となった全ての場面で見られた非訳出表現は、聞き取り通訳におけるものが62件、読み取り通訳におけるものが8件見られた。それらが手話通訳者の全表出のうちに占める割合を、手話については単語ごと、音声については文節ごとに区切って算出したところ、手話表現の10.4%、音声の2.5%が非訳出表現であった (Fig. 1)。これら非訳出表現は、手話、音声とも、聴覚障害者の発言がなかった場面4を除い



(A) 聞き取り通訳における手話による表出



(B) 読み取り通訳における音声による表出

Fig. 1 対象児の良聴耳の聴力図

て、全ての場面において抽出された。

次に非訳出表現の内容について見ると、その機能と目的の多様性から、その種類は、先行研究等 (Metzger, 1999) に基いて当初設定した3分類では十分に記述できないことが明らかとなった。そこでまず、表現内容を大きく「通訳内容の確認」「周辺情報の提供」「その他」に分類し、さらに全体で9の下位項目への分類を想定した (Table 1)。この9項目への分類の妥当性については、2名の手話通訳の専門家によって29件 (全体の約40%) の非訳出表現について評価し、90%の一致率を得た。さらに、機能ごとに分類したこの9項目それぞれについて、複数の方略の使い分けがなされていることがわかった。以下では、場面の状況に応じた調整方略の特徴については、項目ごとにトランスクリプトを例示しながら述べる。

Table 1 非訳出表現の分類項目と出現件数

分析項目	下位項目	内 容	件数
通訳内容に関する確認	読み取り通訳における確認	読み取り通訳を行う際に聴覚障害者に向けられた確認のための表現	3
周辺情報の提供	発言者の明示	現在の発言者を伝える表現	56
	反応の伝達	発言権を持たない参加者が発した音声等を伝える表現	4
	状況の説明	音声以外のその場の情報を伝達する表現	5
その他	交代の報告	通訳者が交代することを伝える表現	2
	呼びかけ	聴覚障害者の注意を引くための呼びかけの表現	2
	繰り返し	同じ内容が2度以上繰り返された表現	2
	読み取り通訳における付加	原文（手話）に含まれていない意味内容が付加された表現	3
	聞き取り通訳における付加	原文（音声）に含まれていない意味内容が付加された表現	2

2. 非訳出表現の項目ごとの特徴

(1) 読み取り通訳における確認：聴覚障害者の手話による発言を読み取って音声に通訳する際、必要に応じて聴覚障害者に対して聞き返し等をする「読み取り通訳における確認」は、聴覚障害者にどのような内容の確認を取るのかによって、聞き返し方略が使い分けられていた。例えば、発言の内容そのものを聞き返して確認する際は、音声による訳出を一時中断して手話

のみで聞き返しを行い、確認が完了してから音声による訳出を再開していた。これに対し、聴覚障害者の発言の中でも数字の部分のみを確認する際は、音声での訳出を継続しながら並行して数字だけを手話で聞き返し、正確な訳出に結びつけていた (Fig. 2)。また、同様に訳出と並行して行った確認でも、手話で表された用語の日本語表現が正しいかどうかを確認するために、音声と手話を同時に使用して、訳出した言

経 過 時 間			
(sec)	0	5	9
h1	900くらい？800か900時間くらい？		
h5	今は うん		
d1	／今／私／院／時／128／時間／		
I(v)	院生の場合には、千、1028時間		
I(s)	呼びかけ／800／900／時間	／千／	／20／
(sec)	10	15	19
h1			
h5			
d1	かな／百／千／28／時間／かな／思う／nod／		
I(v)	かなあ、だったと思います。		
I(s)			

Fig. 2 訳出を継続しながら聞き返した例

h1, h5：健聴者 d1：聴覚障害者
 I(v)：通訳者の音声による表出 I(s)：通訳者の手話による表出
 ~~~~~ は、音声での訳出と並行して手話で聞き返していた部分を示す

業を聴覚障害者に伝え、確認を取りながら訳出した例が見られた。事後インタビューにおいて通訳者は、訳出を中断しなかった理由について、この場面では場の雰囲気をごわしてしまうのを避けるため、音声による訳出が自然に聞こえるように続行しながら確認作業を行ったと述べた。

(2) 発言者の明示：「発言者の明示」は45件で、非訳出表現の中で最も多く見られ、複数の参加者が発言する集団会話に特徴的な機能であると考えられた。中でも、時間的な余裕の有無の要因や、聴覚障害者が、会話の流れから発言者をどの程度予測できるかなどの要因によって、発言者明示の方略が変えられていた。最も簡潔な方略は発言内容を訳出する前に指さしのみで発言者を指し示すものであり、他には、指さしに加えて発言者の名前も表現する、指さしと発言者の名前の後に、／言う／、／質問する／などの説明的な表現を加えるなどの方略が見られた。

(3) 反応の伝達：主たる発言者の発言内容以外に、発言に伴ってその場で起こった音声情報を通訳したものを、「反応の伝達」として訳出と区別して分析した。これに該当するものとして、発言に対する参加者の「ふーん」等といった音声による反応を伝えるものが3件見られた。また、聴覚障害者が配布資料について説明をした後、全体からあがったどよめきを、／PT(表)／意外／(「みんな表の内容がよくわからない」の意【PT：指さしを示す】)という手話によって伝達した例も含まれていた。このように、発言者は特定できないものの全体の雰囲気や笑い声などを伝達するものが2件見られた。

これらのことから、その場で生じる情報を聴覚障害者も共有できるように、主たる発言者の発言内容にとどまらず、時間的な余裕を考慮しながら、できるだけ多くの音声情報を伝達するという通訳者の姿勢がうかがえた。

(4) 状況の説明：発言内容でも反応でもない音声以外の場の情報を伝達する「状況の説明」

は2件見られ、いずれも、参加者らの音声化されていない様子を伝達するものであった。例えば、聴覚障害者の視野に入らない位置にいる健聴者が、うなずきだけで他の健聴者の問いに答えた場合、そのことを手話で伝達したり、また、ある参加者の発言を通訳した後、それが特定の参加者に対する質問であることを強調するために、「…と彼が質問をしました」という意味の説明を行ったりしていた。

(5) 交代の報告：「交代の報告」は、場面1の途中で通訳者が交代する時に、交代することを聴覚障害者に伝えるための、2種類の報告が見られた。まず、それまで通訳を担当していた通訳者2が通訳者1の合図を受け、聴覚障害者に対して／交代／(「交代します」の意)と手話で報告して通訳者1と席を交代した。その間、発言中だった健聴者は発言を中断して交代の完了を待っていたため、通訳者1は席についてから、手話を伴って「どうぞ」と音声で報告をし、健聴者に発言の再開を促していた。

(6) 呼びかけ：聴覚障害者の注目を喚起するための「呼びかけ」は2件見られ、1件は、聴覚障害者が配布資料に視線を落としている時に司会者が発言を開始したため、両手のひらを振って注目を引き、聴覚障害者が2名とも顔を上げたのを確認してから訳出を始めていた。もう1件は、健聴者の発言が「900くらい？」と疑問の形で結ばれた時、聴覚障害者の視線が手話通訳からそれていないにも関わらず、手話通訳者は呼びかけて聴覚障害者の注目をひきつけて、／900／時間／(「900時間？」の意)と訳出し、確実な伝達に結びつけていた。

(7) 繰り返し：一度訳出した内容を2度以上繰り返して表出する「繰り返し」は4件見られ、全て音声から手話への聞き取り通訳におけるものであった。事後インタビューで聴覚障害者1は、通訳者の判断で繰り返し表現されているということは気づかなかったが、次に自分が回答しなければならないということがはっきり伝わってきたと話していた。このように、これらの「よびかけ」や「繰り返し」は、聴覚障害

| 経過時間     |                                                           |
|----------|-----------------------------------------------------------|
| (sec) 0  | 5 9                                                       |
| h1       | 何か質問などは, , , あ, はい                                        |
| h9       | まあ, あの, , ,                                               |
| d1       | 補う/説明/する/こと                                               |
| I(v)     |                                                           |
| I(s)     | 何/質問/                                                     |
| (sec) 10 | 15 19                                                     |
| h1       |                                                           |
| h5       |                                                           |
| d1       | /(d3)/男/説明/補う/説明/言う/nod/ 今/出席/ない/でも                       |
| I(v)     | <u>すみません, (d1) です.</u> えー, (d3) さんの話に少し付け加えてお話ししたいんですけども, |
| I(s)     |                                                           |

Fig. 3 読み取り通訳における付加の例

h1, h5: 健聴者 d1: 聴覚障害者  
 I(v): 通訳者の音声による表出 I(s): 通訳者の手話による表出  
 ~~~~~ は, 通訳者による付加情報を示す

者に対する健聴者からの質問など、聴覚障害者が次の発言者となることが予測される場面で、その状況を確実に伝達するための手段として用いられていた。

(8) 読み取り通訳における付加：読み取り通訳の中で、もとの手話表現に含まれない内容を通訳者が付加した「読み取り通訳における付加」は3件見られた。いずれも音声の会話として自然な訳出になるように、訳出の冒頭に何らかの内容が付加されていた。例えば、聴覚障害者が手話で表出していなくても、訳出において「すみません」と前置きを付加することによって、健聴者が音声で行う発言の意思表示の機能が果たされ、音声での会話として自然なものとなっていた (Fig. 3)。

別の例では、健聴者の問いかけに対する聴覚障害者の発言の冒頭で、発言内容を訳出する前に「ええ」という応答の言葉が通訳者によって付加されていた。これは、健聴者の質問内容を訳出する際、実際は「(本当は授業が20回あるはずなのになのに) 11なのは休講？」という形でなされた音声での質問内容を、聴覚障害者の

発言を引き出す目的で、手話通訳者が聴覚障害者に「11とは何? 休んだのはどうして?」という意味の質問に言い換えていた。そのため、聴覚障害者の回答には、「はい・いいえ」の形での応答が含まれていなかった。そこで、手話通訳者の判断で、聴覚障害者の回答内容の訳出に先立って、「ええ」という応答が付加されていた。

(9) 聞き取り通訳における付加：「聞き取り通訳における付加」は2件見られ、健聴者の発言が途中で途切れた際に、その内容を文末まで補って手話で表出したものと、健聴者2名の発言のやりとりに訳出が追いつかないため、やりとりそのままの訳出を省略して、全体の内容を1文にまとめなおして付加したものがあった。

3. 発言の共起による訳出の省略と調整

訳出の省略は、聴覚障害者の発言の省略が6件、健聴者の発言の省略が29件で計35件であった。

(1) 聴覚障害者の発言を含む訳出の省略：聴覚障害者の発言を含む訳出の省略について

| | | 経過時間 | |
|-------|---|------|----|
| (sec) | 0 | 5 | 9 |
| h1 | | | |
| h5 | 一番下の人の、えっと月曜日だと、通訳人数4人で言うのは | | |
| d1 | | | |
| I(v) | | | |
| I(s) | PT女/最後/女 /例/月/nod/ 通訳/数/4/人/言う/意味 | | |
| <hr/> | | | |
| (sec) | 10 | 15 | 19 |
| h1 | 2人ずつ、じゃなくて1日に4人なので、1コマに何人ずつ行ったかは、1コマに何人かはわからないんだよね | | |
| h5 | 1コマに4人行ったの？ | | |
| d1 | <u>違う</u> | | |
| I(v) | | | |
| I(s) | /1/FS:[コマ]/4/人/通訳/行く/意味/PT(h1)/1日/間/4人/PT(表)/1/FS:[コマ]/数/表/見る/わからない | | |
| <hr/> | | | |
| (sec) | 30 | 35 | 39 |
| h1 | この表からは、 <u>難しい表ですね。</u> | | |
| h5 | <u>ああ、</u> <u>ははは</u> | | |
| d1 | <u>同じ/PT/月/例/学/ル/女/</u> | | |
| I(v) | えと、これは、例えば、学類 | | |
| I(s) | 1/コマ/いくつ/表/見る/曖昧/わからない/同じ | | |

Fig. 4 発話の共起により訳出の省略が生じた例

h1, h5: 健聴者 d1: 聴覚障害者
 I(v): 通訳者の音声による表出 I(s): 通訳者の手話による表出
 ~~~~~ は、訳出が省略された部分を示す

は、健聴者の発言と共起した際に省略が生じたものが4件見られた。その一例をFig. 4に示した。ここでは健聴者5の質問に対する聴覚障害者1と健聴者1の回答が共起しており（Fig. 4で、約12秒経過時点）、通訳者は聴覚障害者の発言を読み取り通訳せず、健聴者1の発言の聞き取り通訳を行った。この訳出は健聴者1の発言にやや遅れていたが、健聴者1と健聴者5の「ああ」「難しい表ですね」というやりとりを訳出せず、やりとりの終了と同時に聴覚障害者1の回答の読み取り通訳に移っていた。この時、聴覚障害者1は健聴者1の「わからないんだよね」という発言に続く発言として「同じ/（「そうです」の意味）」という言い出しで話し始めたが、通訳者はこの訳出を省略していた。こ

のように、聴覚障害者の発言が訳出されなくても、その後、聴覚障害者が次の発言権を得られるように、健聴者の発言の訳出省略や非訳出表現を用いて、通訳者がタイミングを計るという調整がなされていた。更に、通訳者の判断で聴覚障害者の発言の一部の訳出を省略することで、音声上の会話として自然になるような調整もなされていた。

また、同じく聴覚障害者が発言権を得るための調整として、発言の冒頭部分のみを訳出しないで円滑な発言交代のための調整がなされた例が1件見られた。ここでは、前発言者の健聴者が話し終わらないうちに聴覚障害者の発言が始まり、通訳者は健聴者の発言が終了してから聴覚障害者の発言の訳出を始めていた。このとき

健聴者の発言に重複していた、発言の冒頭部分の／PT／時間／（「その時間というのは」という意味を表す）という部分の訳出は省略されていたが、省略することによって、発言者の交代が円滑に行われ、やりとりが自然につながるよう調整されていた。

これらの結果から、特に聴覚障害者の発言が健聴者の発言と共起した場合に、聴覚障害者が円滑に次の発言の機会を得るための時間的な調整として、聴覚障害者の発言の訳出が省略されていたと考えられる。

(2) 健聴者の発言の訳出省略と調整：健聴者の発言の省略については、健聴者どうしの短い発言によるやりとりが連続している場面で、複数の発言が訳出されなかったり、2人の発言が共起した後どちらかが発言権を得たような場面において、発言権を得なかった方の発言が訳出されないなど、音声情報が重複している場面で見られる傾向があった。複数の発言によるやりとりを省略した際は、言い回しや誰の発言であるかが明確に伝えられなかった代わりに、簡潔な言い換えによって要点のみが伝達され、通訳の時間的な遅れも回避されていた。また、「いいですか?」「すみません」といった発言の冒頭のみが訳出されていなかった例が10件あり、そのうち8件は、音声での発言内容の訳出に代わって、指さしや名前の明示といった非訳出表現によって、発言者の明示が行われていた。これは、音声言語では、言い出しに特有の表現があり、これより発言者が誰に代わったかが明らかになるが、手話による表現の際は、手話特有の効率的な表現によって、同等の情報を伝えた結果であるといえる。また、通訳の交代のため通訳者が2人とも席を立っていた間に話された発言は訳出が省略され、交代が完了した後、通訳者はその先の内容から訳出を再開していた。但し、文としては交代前の部分と自然につながる様に訳出されていた。

これらの結果から、健聴者の発言の訳出省略は、通訳者が時間的な遅れを回避するため、あるいはより重要な情報を選択して伝達した結果

として、行われていたと考えられる。

このように、手話通訳に見られる訳出の省略は、手話通訳作業が、複数の発言の近接や重複という、きわめて制限の強い条件の下で行なわれることから生じると考えられる。このような状況を解決するためには、手話通訳者の努力だけでなく、会議に参加する健聴者も含めたすべての人々の対応が必須となろう。

また訳出の省略については、内容をより分かりやすくするための省略という観点もある。このような点については、音声同時通訳の研究において (Metzger, 1999)、異言語間での翻訳可能性について (永田, 1997)、言語的少数者を対象とした通訳における、通訳の忠実性と分かりやすさを高めるための原文の編集 (Pinkerton, 1996) といった課題として検討されている。今後、情報の補償をすすめるための手話通訳の場においても、検討が求められる課題であろう。

#### IV まとめと今後の課題

本研究では、手話通訳研究としてこれまでほとんど取り上げられてこられなかった、通訳者による場の調整技術に焦点を当て、訳出以外の表出と訳出の省略という2側面から、実際の通訳場面を分析した。その結果、抽出された各調整技術を機能ごとに整理することにより、①通訳の時間的な遅れを解消するための調整、②確実な伝達のための調整、③手話と日本語における会話表現の差異の調整、④参加者が場を共有できるようにするための調整、といった技術が用いられていることが明らかになった。これらの調整機能は、発言者が交代する時、聴覚障害者が発言権を得る時、複数の健聴者や健聴者と聴覚障害者が同時に話し始め、全ての情報を同時に訳出することが困難である場合などに、顕著に見られる傾向にあった。中でも、聴覚障害者が発言権を得る場面においては、複数の調整技術が組み合わせて用いられることにより、交代のタイミングを取るための調整や、前発言の内容を確実に伝えるための工夫、読み取り通訳での付加や省略など、聴覚障害者の発言がより



円滑に行われるように調整がなされていた。

今後、多様な通訳場面や通訳者を対象に、聴覚障害者による評価をも加えた実践的な研究を重ね、調整技術の全体像の客観的把握とそれに基づく適切な調整技術のあり方、及び通訳者養成プログラムの開発をすすめる必要がある。また、これと並行してコミュニケーションの対象者となる、手話を知らない人々の手話通訳理解を推進することが望まれる。

## 註

我が国における手話については、日本手話、日本語対応手話、中間型手話という分類が行われており、その言語学的な特徴について独自の特徴が明らかにされつつある。また、これらの手話はコミュニケーション場面での対話相手に応じて使い分けられることが知られている。手話通訳は、健聴者とうろう者や難聴者などを同時に対象とし、さまざまな状況で行われるため、そこで用いられる手話は多様なものとなる。そのため、本研究で言及する手話という用語は、特定の手話言語を想定するものではなく、種々の手話に含まれる要因を含むものとする。

## 文 献

Cokely, D. (1986) Effects of lag time on interpreter errors. *Sign Language Studies*, 53, 341-376.

上久保恵美子・比企静雄・福田友美子 (1997) 聴覚障害者による言語媒体の場面に応じた使い分

けー口話・手話・筆談と手話通訳の有効性ー. *特殊教育学研究*, 34(4), 11-18.

神田和幸 (1994) 手話学講義. 福村出版.

Metzger, M. (1999) *Sign Language Interpreting*. Gallaudet University Press, Washington, D. C.

永田小絵 (1997) 同時通訳・訳出の比較. *通訳理論研究*, 13, 4-23.

Pinkerton Y. (1996) 通訳者には編集が許されるかー日本とオーストラリアの通訳原理の比較ー. *通訳理論研究*, 11, 4-15.

Roy, B. C. (1992) A Sociolinguistic Analysis of the Interpreter's Role In Simultaneous Talk In A Face-To-Face Interpreted Dialogue. *Sign Language Studies*, 74, 21-61.

Shaw, J. & Jamieson, J. (1997) Patterns of Classroom Discourse in An Integrated, Interpreted, Elementary School Setting. *American Annals of the Deaf*, 142(1), 40-47.

白澤麻弓 (2002) 日本語ー手話同時通訳における作業内容の分析. *特殊教育学研究*, 40(1), 25-39.

手話通訳士育成指導者養成委員会編 (1998) 手話通訳の理論と実践. 全日本ろうあ連盟.

Siple, L. A. (1993) The use of pausing by sign language interpreters. *Sign Language Studies*, 79, 147-179.

若松利昭 (1991) 手話の情報伝達機構について6. *日本福祉大学研究紀要第1分冊*, 85, 100-88.

米川明彦 (1984) 手話言語の記述的研究. 明治書院.

—— 2005.8.31 受稿、2005.11.15 受理 ——

## **The Analysis of Adjusting Techniques in Sign-interpreting Situation in Group Conversation**

**Akiko NAKAJIMA and Akira YOKKAICHI**

Most of studies on sign-interpretation were aimed to clarify the linguistic factors, such as translational features and errors observed in the expression. Some studies deal with the evaluation of sign-interpretations by deaf persons. On the other hand, a few attentions have been paid to the role of adjusting performances of interpreter used to progress group conversation smoothly. We aimed to pick out and classify those performances from the ongoing sign interpretation process in the group conversation. The main results were as follows. Sign interpreters expressed the information such as, “confirmation”, “declaration of speaker”, “calling”, and “addition”, in addition to the interpretation of original language information expressed by the Japanese speakers. The sign interpreters also omitted or abbreviated source information when the utterances of the members were overlapped or many utterances were continued in close time interval. These interpreting techniques were used to adjusting differences between the sign language and spoken language in the conversational forms and also have the functions to canceling the time delay in interpretation and selecting the most important information to transmit from the message. Furthermore, in order to promote the deaf persons’ participation to the conversation, the interpreter made up the opportunity when deaf persons intended to express their own opinions.

**Key Words:** sign interpreter   group conversation   adjusting performances of interpreter